

# 「七高僧⑤善導大師について」

今回は、七高僧の第五祖、中国の善導大師についてです。

## 「善導独明仏正意」

〈善導 ひとり仏の正意をあかせり。〉

《善導大師はただひとり、これまでの誤った説を正して仏の教えの真意を明らかにされました。》

この句から後は正信偈のおつとめの音の高さや節が変わるので、皆様もこの言葉は印象に残っていることと思います。

善導大師は、『観経疏』という『観無量寿経』（略して『観経』）の注釈書を著して、当時、他の諸師たちの『観経』理解が間違っていたことを示されました。

仏の正意（本来の意思、まことの意味）とは、厳しい自力の修行によって浄土のありさまを心に念じる「観想の念仏」によるのではなく、誰もが称えられる「称名の念仏」こそが往生の道であると善導大師は説かれました。

このため親鸞聖人は、「善導ひとり、仏の正意を明らかにした」といわれたのです。

善導大師は、7世紀、中国の唐の時代に浄土教を大成されたお方です。

隋の時代も終わりに近い大業9年（613）、中国山東省（安徽省とする説も）にお生まれになり、若くして出家されて仏教を学ばれました。

はじめは『法華経』や『維摩経』を学んでいましたが、後に浄土教に転向されました。

29歳の時、山西省太原郊外の玄中寺に七高僧第四祖の道綽禪師を訪ねられて、道綽禪師から直接『観無量寿経』を学ばれます。

道綽禪師が645年に84歳で亡くなった時、善導大師は33歳でした。

その後、唐の都・長安（今の西安）に戻って、光明寺などで称名念仏を多くの人にすすめられ、道場を造ってお念仏の教えをひろめられました。

『観経疏』をはじめ多くの書物を著して、お念仏による往生こそが、末法の悪世の人々を救う仏様の正意すなわち本来の意思やまことの意味であることを明らかにされました。

当時は、浄土三部経のうちのひとつである『観無量寿経』が人々の注目を集めていました。

『観経』は、インドの王舎城で起こった悲劇、すなわち息子の阿闍世太子による父王頻婆娑羅殺しが

元で苦悩する、王妃で阿闍世太子の母である韋提希夫人のために、お釈迦様が阿弥陀仏とその浄土である極楽を観想する定善と散善の十六種類の方法を説いたお経です。そしてどんなに悪い行為をした人でも臨終のときに十回、南無阿弥陀仏と称えると極楽に往生できることが説かれています。

善導大師より前の時代は『観経』の解釈が善導大師以後とは異なり、悪人が往生できるような浄土はニセモノの浄土であるとか、阿弥陀仏の浄土に往生できるのは実はすぐれた人で、凡夫は浄土に往生できない、という説などがありました。

このような解釈に対して、善導大師は『観経疏』を著して、当時の他の祖師がたの理解が間違っていることを示され、罪悪の重い凡夫こそが、念仏によって真実の浄土に往生できることを明らかにされました。

私たちは日頃、自分が悪人だという意識をなかなかもてませんが、仏様の目から見れば、私たちは皆、悪人と映ってしまいます。完璧な人間はいません。善人とは、自力をたのみ自分の中の悪に気づかない傲慢な人のことです。

善導大師の『観経疏』は、それまでの自力的な『観経』解釈を他力に解釈したものとして、重要な著作といえます。

それをたたえたのが、最初の一句である「善導独明仏正意」すなわち「善導はただひとり誤りを正し、仏の正意を明らかにされた」という言葉です。

ですからこの「ただひとり」というのは、他の七高僧の中でただひとりということではなく、当時の中国における聖道の祖師がたに対して、善導大師ひとりが仏さまの本意を明らかにされたということです。

善導大師は、唐の永隆2年（681）に69歳で往生されました。

### 「こうあいじょうさん よぎやくあく 矜哀定散こうみょうみょうごうけんいんねん 与逆悪 光明名号顯因縁」

〈じょうさん ぎやくあく こうあい こうみょう みょうごう いんねん 定散と逆悪とを矜哀して、光明・名号の因縁をあらわす。〉

《じりき ぜんぎょう ひと じょうさん ごくあく ひと ぎやくあく ひと あわ によらい こうみょう みょうごう 自力の善行の人（定散）も極悪の人（逆悪）も、すべての人を哀れんで、如来の光明と名号が縁となり因となってお救いくださると示されました。》

「こうあい 矜哀」とは、あわれむことです。

「じょうぜん 定散」とは『観経』に説かれた「じょうぜん 定善」と「さんぜん 散善」の人のことで、「じょうぜん 定善」は阿弥陀仏の極楽浄土に往生するのに、精神を統一して浄土と仏やしやうじゆ 聖衆（菩薩）を観想する定善十三観を行なう人のことです。「さんぜん 散善」は、精神を統一しない乱れた心のまま、悪を捨てて善を修める人のことです。どちらも、自力での修行や善行を修める人のことです。

「与」は、「…と」という、英語で言う「and」の意味を表します。

「逆悪」とは、「<sup>ごぎやくざい</sup>五逆罪」と「<sup>じゅうあく</sup>十悪」を造る悪人のことです。

「五逆罪」とは、①母を殺す（<sup>せつも</sup>殺母）②父を殺す（<sup>せつふ</sup>殺父）③聖者を殺す（<sup>せいじゃ</sup>殺阿羅漢）④仏の身体を傷つけ出血させる（<sup>しゅつぷっしんけつ</sup>出仏身血）⑤教団（<sup>サンガ</sup>僧伽）の調和を破壊し分裂させる（<sup>はわごうそう</sup>破和合僧）、という重い罪の事です。

「十悪」とは、①生き物を殺す（<sup>せつしょう</sup>殺生）②盗み（<sup>ちゅうとう</sup>偷盗）③邪な男女関係をもつこと（<sup>じゃいん</sup>邪淫）④嘘をつくこと（<sup>もうご</sup>妄語）⑤人を仲たがいさせる言葉（<sup>りょうぜつ</sup>両舌）⑥罵りの言葉（<sup>ののし</sup>悪口）⑦まことの飾った言葉（<sup>きご</sup>綺語）⑧貪り（<sup>むさぼ</sup>貪欲）⑨怒り（<sup>とんよく</sup>瞋恚）⑩愚かさ（<sup>いか</sup>愚癡）、という十種の悪い行為です。

「光明名号顕因縁」の光明とは阿弥陀仏の智慧であり、名号とは「南無阿弥陀仏」というお念仏です。「顕」は、あらわれること、物事のあきらかなこと、という意味です。「因」は「原因」であり、「縁」とは原因に直接関わる「条件」の事です。名号が因となり、光明が縁となって、私たちを救ってくださる、と善導大師は示されました。

### 「<sup>かいにゆうほんがんだいちかい</sup>開入本願大智海 <sup>ぎょうじゃしょうじゆこんごうしん</sup>行者正受金剛心」

〈<sup>ほんがん</sup>本願の<sup>だいちかい</sup>大智海に<sup>かいにゆう</sup>開入すれば、<sup>ぎょうじゃ</sup>行者まさしく<sup>こんごうしん</sup>金剛心を受け、

〈<sup>ほんがん</sup>本願の<sup>おお</sup>大いなる<sup>ちえ</sup>智慧の<sup>うみ</sup>海に入れば、<sup>はい</sup>行者はまさしく<sup>ぎょうじゆ</sup>金剛（ダイヤモンド）のように<sup>こんごう</sup>堅固な<sup>けんご</sup>他力の<sup>たりき</sup>信心<sup>しん</sup>を得て、

開入は「<sup>かいじきにゆう</sup>開示帰入」の略で、見失ったものを明らかに示し、それに立ち帰って迎え入れられることです。

本願大智海というのは、すべての人々を救うと誓われた阿弥陀仏の本願の智慧のはたらきを、深くて広い海にたとえられたものです。

これは川から流れてくる水が海に入り、同じ味の海水となることをたとえています。親鸞聖人は『教行信証』などのお聖教の中で、しばしば「海」という言葉が使われています。

『正信偈』だけでも、「<sup>ゆいせみ</sup>唯説<sup>だほんがんかい</sup>弥陀本願海」、「<sup>ごじよくあく</sup>五濁<sup>じぐんじょうかい</sup>悪時群生海」、「<sup>によしゆしいにゆうかい</sup>如衆水入海一味」、「<sup>きにゆうくどくだいほう</sup>帰入功德大宝

海」というように、「海」という言葉が全部で5回出てきます。

これはおそらく、親鸞聖人が新潟に流罪となったときに毎日、日本海の波を見ておられたところから、聖人は「海」という言葉を好んで多く使われたのではないかと思われます。

そのような阿弥陀仏の智慧の海に入れば、念仏の行者はまさしく「金剛心」を受けるといのです。

「金剛」とはダイヤモンドのことで、硬くて壊されることのない尊いもののことをいいます。

「金剛心」とは、ここでは他力の信心のことです。

自分の愚かな思いによって起こす自力の信心はもろくて壊れやすいですが、阿弥陀仏からいただいた信心はダイヤモンドのように硬くて壊されることなく、貴重であることをいったものです。

### 「慶喜一念相應後 与韋提等獲三忍 即証法性之常樂」

〈慶喜の一念相應してのち、韋提とひとしく三忍を獲、すなわち法性の常樂を証せしむといえり。〉

《お念仏をよろこぶ心がおこったとき、韋提希夫人と同じく喜忍・悟忍・信忍の三忍の徳を得て、浄土

に往生してただちにさとりを開くと述べられました》

「慶喜」とは徳川慶喜のことではなく、よろこぶということです。

「相應」とは、心と心の作用が和合することです。

「韋提」は、『観経』に登場する韋提希夫人のことです。

『観経』では、お釈迦さまが韋提希夫人に苦悩を除くための教を説かれた途端に、阿弥陀仏と観音・

勢至の二菩薩が姿を現し、韋提希夫人はそのお姿を見て、ただちに「三忍」を得たと説かれています。

「三忍」は「無生法忍」(無生忍)ともいい、他力信心にそなわる三つの徳のことで、①喜忍(仏法

を聞いて生じる喜びの心) ②悟忍(真実のいわれをはっきり知る心) ③信忍(本願を疑うことなく信じる心)の三つです。

この「三忍」が、一念の信心のなかに同時に働くとされます。

すべての人を救うと誓われた阿弥陀仏の本願を喜べる人は、韋提希夫人がそうであったように、この「三忍」を得られると善導大師は教えられたのです。

「法性」は、真如(人々の分別を超えた存在のありのままの姿)とか、事や物の不変の本質のことです。

「常樂」の「常」は一定して変わらないことで、「樂」は苦に対する樂ではなく、私たちが認識する苦樂を超えた安樂のことを言っています。

そしてやがて浄土に生まれると、すぐに悟りを開かせていただく(「即証法性之常樂」と善導大師はいわれたのです。

「善導独明仏正意」という短い言葉に込められた一連の文章には、このような意味があったわけです。当時ただお一人、お釈迦さまの本当のお心を明らかにしてくださった善導大師の功績に感謝しながら、本日のお話を終わらせていただきます。ありがとうございました。